

## 杉山忠平君の「イギリス信用思想史研究」に対する授賞審査要旨

本書は、正確には、十七世紀のイギリス土地銀行信用思想史の研究であり、学問研究の基本条件としてのオリジナリティーを尊重し、国内的・国際的に従来開拓の行きとどかなかつた研究分野を対象とし、図式的理解の態度をいまいしめ、徹頭徹尾一次的源泉資料に依拠し、独自の研究成果を体系づける目的をもつて書かれている。

杉山忠平君は、まず、イギリス重商主義の主要な諸論議を既知の前提として、それらを再現せず、それらを取り上げる場合にも、杉山君の関心は、従来看過されてきたそれらの諸部面、ことに信用観との関係を抽出している。

杉山君は、十七世紀イギリス初期信用思想は、その時期のイギリス経済発展の最も具体的表現であるとし、このことを明らかにしてはじめてこの時期の現実的・理論的全容の理解が可能になるという見地から、信用制度が多少とも具体性をもつて論議の対象となりはじめた同世紀前葉からそれが最盛期に達する九〇年代にいたるまでの信用思想の生成と展開との過程を、それ自体として、また重商主義との関連において、はじめて系統づけ、同時にそれを土地銀行論形成の前史たらしめている(第一章)。

ついで杉山君は、右の発展を背景とし、かつその一帰結として現われるものとしての土地銀行論の全容を、(一)事実史と(二)思想史との両面から内在的に究明する。(一)事実史的関連では、(1) Hugh Chamberlen (c. 1630-?) (2) John Briscoe (?-1697) (3) John Asgill (1659-1738)らの企画の内容と推移とを個別的に追求し(第三、第五、第七章)、それらがイングランド銀行に対立する点において、また土地を基礎として信用を創造することによって貨幣資本の不

足を解決し、トレード (Trade) と国富との増大を実現しようと企図する点において共通でありながら、相互にきわめて独自のかつ敵対的なものであつたことを明確にする。杉山君は、また、従来少数の研究者が土地銀行に言及する場合に陥つた誤解を検討し、すすんで、一六九六年の議会法による土地銀行が、(1)による、または(2)による、または(1)と(2)ないしは(1)と(2)と(3)とによる、または(2)と(3)との合同による企画ではなく、(3)の主導によることを、実証的分析によつてはじめて明らかにしている(第二、第七章)。

(二)思想的関連では、右の諸企画を支えるそれぞれの信用論を解明し(第三、第五、第六、第七章)、さらに価値論、貨幣論、貿易論等にも注目し、かれらの経済思想の特徴的性格を明らかにすると同時に、かれらが若干の点において次世紀以降の古典的政治経済学の独立的源泉を成していることを見出している。また、杉山君は、土地銀行論が全体としてイギリス重商主義の重要な一面を形成することをはじめて立証し(第八章)、その歴史的位置づけをも行なつてゐる。

イギリスにおいては、本書(一九六三年刊行)よりも早く、J. Keith Horsefield, *British Monetary Experiments, 1650-1710*, London 1960 が豊富な資料にもとづいて本書とほぼ同じ時期の複雑な貨幣問題をはじめ徹底的に取り扱い、すでにそれへの批評と要望とが現われている。杉山君は、この研究が従来ほとんど詳しく研究されていなかったこの時期の貨幣問題について資料にもとづく事実堅めをした業績を認めるとともに、この研究が思想史の面を取り扱っていないこと、資料の読みちがえや文献指示の誤りがあること等々を指摘している。なお、土地銀行に関する限り、杉山君は、Horsefield氏よりも早く日本の雑誌に研究を発表しているので、ブライオリティーは杉山君にあると

言つてよからう。

杉山君は二〇〇以上の資料を用い、その大半は一次的源泉資料（約一〇のマニユスクリプトを含む）である。

しかし、本書に要望さるべき点はいくつかある。本書は、思想を主題としているとはいへ、杉山君自身の趣旨（第一章）にしたがつて、その思想の経済的基礎の問題を社会経済史的により詳しく述べることが、望ましい。また、資料については、土地銀行がイングランド銀行への対抗企画であつたとすれば、源泉資料に忠実な杉山君は、イングランド銀行側の資料を探索して問題を一層鮮明にすることができたであろう。杉山君は、同銀行の支持で作られた蔵書目録によつて土地銀行関係資料の蔵否を確認してはいるが、杉山君が資料について示した密度をもつてイングランド銀行側のマニユスクリプトや議事録の類を追求しなかつたのは、客観的研究のために惜しまれる。また、杉山君は、日本において土地銀行に言及した若干の学者をとりあげているが、一一二の先駆的言及者を見落している。

それにもかかわらず、杉山君が国際経済学界における未開拓の領域を、源泉資料に密着してはじめて開拓した業績は、高く評価されるであろう。